

## ヘーゲルをどう読むか

<http://philosophy.hix05.com/Hegel/hegel01.how.html>

体系という点に関していえば、ヘーゲルほど体系にこだわった哲学者はいないだろう。ヘーゲルによれば、世界とは一つの単純な原理に従って成立している壮大な構築物なのだ。その単純な原理とは精神のことである。**世界の究極的な原理としての精神が、自ら展開することによって世界が生成する。**ヘーゲルはそう考えるのだ。

ヘーゲルによれば、**自然的な世界も精神的な世界も同一の原理によって動いている。**その原理の内実をなすものは**絶対精神**である。絶対精神が物の形をとると自然的な世界としての相貌を呈し、意識の形をとると精神的な世界の相貌を呈する。

だから意識と、その対象としての自然的な世界とは、無媒介に対立しあうのではなく、同じものが違う形を取って現れているに過ぎない。二つとも同じ原理によって動いている。その原理をそれとして取り出せば、それは論理学の内容と同じものになる。

こんなふうに整理すると、**ヘーゲルの体系がスピノザのそれに似ている**ことに気づく。**スピノザの場合においては、神が世界の究極の原理である。実体としての神が展開したものの、それが世界である。**だからそれは神の別名なのだ。あるいは神とはこの世界を別の言葉で置き換えたものなのだ。**しかしスピノザの神は、ヘーゲルによれば、静止したものである。**それは動かない。どこまでも止まったままである。というより、たんにそこに存在している。何故そこに存在しているのか、その理由は問題にならない。**ただ存在すること、それが神の本質なのだ。**

これに対して**ヘーゲルの絶対精神は、静止したままのものではなく動いているものである。**それは絶対精神が実体であるとともに**主体であるからだ。**主体とは自ら動く存在なのである。というのは、主体とは精神なのであるから。これを言い換えると、**精神は実体である、実体は主体である、主体は精神である、**と云う具合に一つの円環運動が成立する。**この世界はいたるところ精神が充満しているというのが、この円環運動の内実なのである。**

ヘーゲルの**絶対精神はまた、絶対知という形をとることで、神よりも上位の概念に位置付けられる。**ヘーゲルにあっては、神とは絶対知のひとつの段階を示す概念なのだ。これはある意味ですごい主張である。神が精神のとり一つの段階などというと、神は絶対者の地位から引きずりおろされて、人間の精神の一つの形、つまり付属物に過ぎないということになる。それはもう理神論を超えて無神論の領域にある考えだといってよいほどだ。それでもヘーゲルが自分を無神論者などと思わなかったのは、彼にとっての神が非常に特殊な神だったことを物語る。

ともあれヘーゲルの体系は、絶対精神という単純な原理によって貫かれた非常に整合的なものである。**絶対精神が物質の形をとると自然が成立し、絶対精神が意識の形をとると**

**精神世界が成立し、精神世界が人間社会に行き渡ると人倫世界が成立する。そしてこの人倫の世界にも絶対精神はあまねく貫徹する。その結果、そこからは歴史哲学やら法哲学やらを貫く様々な原理が抽出される。それらの原理はすべて同じ糸によって紡がれているのである。**

絶対精神は主体であるばかりではない。**主体としての絶対精神は、一人ひとりの個人にとっては己の存在の根拠であるが、同時にまた、個人とは別物として、個人が獲得すべき知のあり方であるともいえる。**言い換えれば、個人は絶対精神から見れば一つの疎外体であるが、**個人から見た絶対精神は知の客体である。**しかして個人は自分の意識の経験を重ねることによって、この絶対精神の最高のあり方に到達することが出来る。その最高のあり方とは絶対知のことである。**個人の意識が経験を重ね、ついに絶対知の境遇に到達する、その経過をたどったものが「精神の現象学」といわれるものだ。**

ところでヘーゲルの「精神現象学」という書物は実に面白い本だ。とにかく読みづらくて何が書いてあるのかチンプンカンプンなところも多いのだが、そこを我慢して読み抜くと色々なことが見えてくる。これは基本的には、感性的な知から始まって次第に複雑性をまし、最後には絶対知に至る人間の意識の経験を陳述したものなのだが、その過程で、絶対精神の壮大な体系が現れて来ると同時に、人間の精神の活動の原動力をなしている要素も現れてくる。絶対精神の現れと称する体系の部分については、ラッセルがいうようにほとんど誤りだといってもよいが、それを紡ぎだすところの原動力となるもの、つまり方法については、なかなか捨てがたいものがある。

ヘーゲルの方法とは、簡単にいえば、**弁証法**と呼ばれるものだ。ヘーゲルはこれを、人間の認識活動を貫く原理であると捉える一方、意識にとっての対象的な世界を貫く原理であるともみている。つまり対象世界と人間の認識活動とは互いに無媒介に対立する者ではなく、同一の原理によって動いている。その原理を対象に即してみれば実体とか法則という形をとり、人間の認識に即してみれば概念という形になる。法則と概念とは同じ一つの物が異なった相貌で現れているのだ。ヘーゲルはそう考えるわけなのである。

それ故この弁証法は、極めて観念論的な相貌を帯びることもあるが、マルクスの唯物論と結びつくといった風に、変幻自在なところもある。その変幻自在なところが、ヘーゲルの哲学を 20 世紀まで生きながらえさせた最大の要因だということもできる。読み方次第でいかようにも料理できる手合いの思想。それがヘーゲルの弁証法だ。一方ヘーゲルの体系の方は、すでに 19 世紀にうちにその存在意義をほとんど失っていたといってもよい。

## ヘーゲルの理性

<http://philosophy.hix05.com/Hegel/hegel10.reason.html>

ヘーゲルの精神現象学は、**意識**、**自己意識**に続いて、**理性**へと進む。しかし理性の登場の仕方が聊か唐突なので、読者はちょっと面食らう。というのも、意識、自己意識と読み進んできた読者の前に、いきなり理性があらわれて、こう宣言するからだ。「**理性とは、物の世界のすべてに行き渡っているという意識の確信である。**」

**意識**の章においてヘーゲルが取り上げていたのは、意識の主体と対象の関係であった。主観と客観との関係と言ってもよい。この中でヘーゲルは、**主体と対象**、**主観と客観**とが対立しているばかりではなく、**統一**してもいると論じた。何故なら、主観といい、客観といい、同じものが見方の相違によって異なって見えるに過ぎないからである。

ついで、**自己意識**の章においては、ヘーゲルは人間同士の関係を取り上げた。その中でヘーゲルは、人間は孤立した抽象的な存在に留まるのではなく、**人間社会の一員として存在するのである**し、したがって世界の見方についても、人間社会の制約を受ける、と考えた。ここでは**個別者としての個人と普遍的存在としての人間社会との相互の対立と統一の相**が展開されていたわけである。

**理性**は、**意識**と**自己意識**の後に、それらの**統一体**として現れる。ここでいう統一とは単なる寄せ集めではなく、**否定を媒介とした統一**である。したがって、**対象との関わり合い**においては、**理性は対象を否定しつつ保持する**という態度をとる。また、**他の自己意識との関わり合い**においては、**理性は人間社会の制約を否定しつつ保持する**という態度をとる。対象も人間社会の制約も、自分とは異なったものに見えながらも、実は自分と異なったものではない、そういう風に受け取るわけだ。ということは、**対象的世界も人間社会も、自分自身の疎外された様態に過ぎない**ということである。そこから「**理性とは、物の世界のすべてに行き渡っているという意識の確信**」が生まれてくるわけである。

主観と客観、個別と普遍との対立と見えるものは、実は本当の対立ではない。

主観も客観も、同じ一つの物、すなわち**絶対精神**が自己疎外して個別化したものに過ぎない。だから**絶対精神の立場からすれば**、どちらも自分自身の一つの契機に過ぎない。それが対立して見えるのは、外化され個別化したものの立場から見るからだ。つまり我々個別の人間は、**絶対精神の疎外された形である限り制約を受けた存在であるが、可能態としては、絶対精神そのものの一部として無制約なのである。**

個別と普遍との関係についても、同じようなことがいえる。**個別の存在としての個人と普遍的な存在としての人間社会**とでは、**一見対立した関係にあるように見えるが、そうではない**。どちらも**絶対精神の立場からすれば**、自分自身の**一契機に過ぎない**。絶対精神が自己疎外して個別化したものが個人なのであるし、それが**ある一定の人間社会にとって倫**

理的な枠組となったものが、当該の人間社会がその成員たる個人に課す制約となるに過ぎない。

こんなわけで、我々が生きているこの世界は、絶対精神というものが自己疎外して展開したものなのだ。その**絶対精神が人間の意識の形をとると、理性になる**。その理性の立場からすると、この世界が絶対精神の現れだということは、**理性としての自分自身がこの世界全体を成り立たせている根拠だ、ということだ**。そこから、「**理性とは、物の世界のすべてに行き渡っているという意識の確信**」が生まれてくるわけなのである。

要するに、ヘーゲルが理性の章で展開しているのは、**絶対的な観念論**だということになる。絶対的などというのは、それがこの世界についての唯一の説明原理であるということであり、**観念論**というのは、この世界を精神という観念的な原理で説明しているからである。

上述の理性についての宣言に続いて、ヘーゲルは次のようにいっている。

「理性をそういうものとしてとらえるのが、観念論の立場である。**理性として登場する意識が、すべてに行き渡っているという確信**をあっさりとはがものにしてのさまを、観念論がこれまたあっさりとはがものにしたものが、**“わたしはわたしだ”**という命題である。ただし、ここでわたしの対象となるわたしは、自己意識が一般に対象とする空虚なわたしでもなければ、自由な自己意識が対象とするような、自分と並んであるものをそのままにしておいて自分に引きこもるわたしでもなく、自分以外に対象の存在しないことを意識しているわたし、現実にある物の世界すべてに行き渡っている唯一の対象たるわたしなのであるが」

ここでヘーゲルの言っている**わたし**とは、**絶対精神そのものと一体化したものとしてのわたし**であって、デカルトやカントが想定していたような、孤立した抽象的な存在としてのわたしでないことはいうまでもない。**絶対精神の権化となったわたし**が、「この世界は自分自身が充滿した、自分自身そのものであるような世界なのだ」と喝破するわけなのである。

これを言い換えると、**理性とは主観と客観とが混然と融合したもの、また個別と普遍とが一致したもの**ということになる。主客の対立とか個普の対立とかいうものは、疎外され個別化された個人の意識の視野にそう見えるだけなのであり、絶対精神の立場から見れば、みな自分自身の姿そのものなのである。

しかして、**この絶対精神が個人の意識に宿ったもの、それが理性なのだ**と言い換えることも出来る。その立場からすれば、「**理性的なものが現実的であり、現実的なものが理性的なものである**」(法哲学)ということになる。現実の世界は理性が実現した姿にほかならないのであるから。